

アロマテラピーマッサージ実施後の 患者インタビューに学生が同席する意味 —臨地実習における学生の自己効力感を高める学習方法の考察—

狩谷恭子, 関千代子, 足立妙子, 長島緑

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】 看護学生からアロマテラピーマッサージを受けた患者に、施術の効果に関するインタビューを行い、その場に学生が同席するという試みを行った。そこで、本研究の目的は、患者へのインタビューに同席した学生自身が、患者の反応をどのように捉えたかを分析し、学習方法を考察することである。12名の学生に半構成的面接を実施し、得られたデータを質的記述的に分析した。その結果、【心身のリラクゼーション】、【関係性構築の効果】、【探究心】、【効果不明】、【実施して気付いた学び】、【看護観の変化】の6つのカテゴリーと17のサブカテゴリーが抽出された。学生が患者のインタビューに同席し、患者からプラスの効果聞いたことは、フィードバック効果により、学生自身の内発的動機づけとなり、自己効力感を高める結果となった。学習方法として、教員や指導者だけでなく患者からのフィードバックは、学生の自己効力感を高めるうえで重要であることが明らかになった。(医療保健学研究 第2号：117-129頁／2011年3月2日採択)

キーワード： 看護学生, アロマテラピーマッサージ, 自己効力感, 学習方法, フィードバック

序 論

厚生労働省は、看護基礎教育における技術教育の現状と課題、臨地実習において学生が行う看護技術について、基本的な考え方、身体的侵襲を伴う看護技術の実習指導のあり方など5回にわたる検討会を行い、2002年に「看護学教育の在り方に関する検討会報告書」を公表し

た。その中で、臨地実習において学生が行う基本的な看護技術の考え方として3段階の水準(表1)が設けられ、さらに学生が実施する基本的な看護技術を13項目に分けて、項目毎に技術水準が提示された。

技術水準項目の一つに「安楽確保の技術」がある。その小項目として、「体位保持、翻身等身体安楽促進ケア、リラクゼーション、指圧、マッサージ」の技術が、水準1(教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの)で位置づけられている。

本学では3年次に、老年看護学援助論の「休息の援助」の単元として、アロマテラピーマッサージ(以下、マッサージとする)の演習を180

連絡責任者：狩谷恭子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622(代表)

FAX: 029-826-6776

e-mail: k-kariya@tius-hs.jp

表1. 看護技術の水準.

水準 1	教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの。	実施しようとする技術が特定の患者の状態に適していると認められたものであれば、患者・家族の承諾を得て学生が主体となり単独で実施できるもの。
水準 2	教員や看護師の指導・監視のもとで実施できるもの。	患者・家族の承諾を得て教員や看護師の指導・監視のもとで学生が実施できるもの。
水準 3	原則として看護師や医師の実施を見学するもの。	原則として学生による実施は行わせないものとする。ただし、看護師や教員又は医師の指導監視のもとで患者の身体に直接触れない範囲で介助を行うことは差し支えない。

看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書(厚生労働省, 2003)

分設定している。これは、心身の緊張を解きほぐすリラクゼーション方法を習得することをねらいとしている。本学は今年度開学4年目を迎え、これまで本格的な各論実習を進めてきた。臨地実習は、学生が学内で学んだ知識、技術、態度の統合を図り、看護実践能力の基本を身につけるために不可欠な学習過程である。また、実習は看護に必要なコミュニケーションを基盤とした人間関係能力を育成する重要な機会である。

本学の4年生は既習の足浴やマッサージの知識・技術を、臨地実習の中で実際にリラクゼーションの看護ケアとして展開してきた。学生は足浴やマッサージの技術を通し、患者とのコミュニケーションを図り関係性を築いてきた。マッサージは患者の心身の安寧にはたらき、QOLの向上をもたらすだけでなく、実施した学生も患者の安楽を察知し、学生の自己効力感をも高めると考える。これは、患者・学生間の相互作用であり、臨地実習における有効な学習効果であると期待される。

リラクゼーションやマッサージを基礎教育に取り入れた先行研究では、原田他(2007)の調査で、看護系大学において安楽確保のための「リラクゼーション」、「指圧」、「マッサージ」に関する研究は極めて少なく、授業項目として取り上げている大学も少ないと報告されている。横山他(2005)の調査では、臨地実習の経験の意味づけを促進させるには、自己効力に効果的に働きかけることの有用性と、学生に対する

「肯定的な関わり」が学習過程の基盤となることが報告されている。

そこで本研究では、学生が臨地実習で患者に行ったりラクゼーションケアの効果を、患者から直接聞くことがどのような意味をもつのか、学生自身が自己の学習を振り返る機会となり、学生の自己効力感を高めているのか、学習効果を確認することは必要であると考えられる。

研究目的

本研究の目的は、学生が臨地実習で患者にアロマセラピーマッサージを実施した後、学生が患者インタビューの場に同席することによる学習の変化を把握し、学生の自己効力感(self-efficacy)を高める学習方法を考察することである。

用語の操作的定義

1. 自己効力感(self-efficacy)

本研究は、Banduraの提唱した自己効力感(self-efficacy)を採用した。坂野と前田(2002)は、自己効力感とは行動特性を示す概念の一つで、自己効力感(self-efficacy)はある特定の場面で遂行される特定の行動に影響を及ぼすという意味で、ある行動に対する自信・確信のことをいう。自己効力感を高める4要因として、①遂行行動の達成、②代理的経験、③言語的説得、④情動的喚起があると述べている。

2. アロマテラピーマッサージ(Aromatherapy Massage)

本稿でいうアロマテラピーマッサージとは、精油(植物に含まれる揮発性の芳香物質を含む有機化合物)を植物油で希釈したものを利用して行うマッサージである。方法は、1830年代にスウェーデンで考案されたオイルマッサージテクニックである。これは、筋肉と関節に深く働きかけ、解剖と生理学の従来の西洋の概念に基づいた手法が含まれている(スウェディッシュマッサージ)。

医師法17条にある「あん摩マッサージ指圧師、きゅう師などの医業類行為」とは異なるものである。

授業の履修状況

1. 科目名：老年看護学援助論
2. 対象学年：3年次
3. 学習目的：補完代替医療とアロマテラピーについて学び、休息・癒しのケアに関する技術を習得する。
4. 演習方法：講義と演習で180分。
 - 1) 講義内容
 - (1) 補完代替医療について
 - (2) 癒し、アロマテラピー、精油について
 - (3) マッサージについて
 - 2) 演習内容

アロマハンド/フットマッサージを2人1組でロールプレイ

 - ① ハンドマッサージ技術演習(動画を参照しロールプレイ)
 - ② フットマッサージ技術演習(予備時間で資料を基に実施)
 - 3) 実習

3年後期からの臨地実習では機会があれば、患者の必要度に合わせ看護計画を立案し、指導を受けながら実施する。
5. 講師背景

講師の背景は、看護師、看護系大学院で

‘Whole Persons Healing in Health Care’の科目を6単位取得、日本アロマ環境協会アロマテラピーアドバイザーの認定を受けている。また、スウェディッシュマッサージに関してはリフレクソロジストより理論と技術講習を受けている。

方 法

研究デザイン

質的帰納的研究(内容分析)

研究期間

平成22年7月～12月

対 象

本学医療保健学部看護学科4年生で、成人看護学および老年看護学実習で患者にマッサージを実施し、研究趣旨に同意が得られた学生12名。

研究方法

1. 調査方法

- 1) 学生は患者にマッサージを実施する。

臨地実習において、リラクゼーションケアが必要だった受け持ち患者に対して、学生が計画したマッサージを希望した患者にのみ実施した。
- 2) 教員は学生がマッサージを実施した後に、技術の評価および効果について、患者にインタビューガイドに沿って30分程度の半構成的面接を実施した(表2)。
- 3) 学生は患者のインタビューに同席する。学生は同席のみで、インタビューには関わらないとした。
- 4) 教員は学生がマッサージを実施した後、

表2. 患者へのインタビューガイド.

態度について	1. 事前説明はどうだったか(十分理解できる内容だったか) 2. 学生として態度はどうだったか(謙虚な態度であったか) 3. 医療者(看護師)を目指すものとして、態度はどうだったか
技術について	1. 物品の準備での手際はどうか 2. 順序や手順はどうか 3. 手技(圧のかけ方・強さ・もみ方・なで方・スピードなど)はどうか 4. 一番気持ちのよかった方法はあったか 5. 実施している時間の長さはどうか 6. 実施中の会話はどうか
道具について	1. アロマオイルを使用することはどうか 2. 心地よいと感じる香りだったか 3. 使用するタオルやお湯などの物品はどうか
時間設定	1. 実施した時間帯の調整はできたか 2. どのような時間帯に実施したいか
マッサージの効果について	1. リラクゼーションマッサージを実施した箇所や体全体に感じた変化はあったか 2. それは、良い変化と感じたか 3. 痛みや腫れ、痒み、気分不快など、嫌だと感じる変化はなかったか 4. マッサージ中や後に癒された気分を得ることはできたか

表3. 学生へのインタビューガイド.

準備について	1. 物品は適切だったか 2. リラクゼーションの方法は何を参考にしたか 3. 自分の準備として練習して臨んだか
実施について	1. 手技はどうか(圧・スピード・時間配分等) 2. 実施中意識したことは何か
態度について	1. 挨拶や身だしなみはどうか 2. 患者への事前説明はしたか
時間設定	1. 実施した時間帯の調整はできたか 2. どのような時間帯に実施すればよいと考えたか
マッサージの効果について	1. 患者への効果はあったと思うか。それはどのような点から評価できるか 2. 修正したところがあれば、どのようなところか
指導について	1. 教員の指導はどうか 2. 指導者の指導はどうか
その他	1. マッサージ実施前後で、あなた自身に何か変化はあったか 2. 実際に行ってみて、良かったこと、悪かったことがあるか 3. 今後リラクゼーションのケアについて何か考えていることがあるか 4. リラクゼーションの方法の実施は、あなたの看護観に影響があったか

同席した学生にインタビューガイドに沿って30分程度の半構成的面接を実施した(表3)。

2. 調査分析方法

録音した面接の内容を逐語録に書き起こし、文脈がわかるように記録した。その後、以下の手順で内容分析を行った。

1) 文脈を単独で理解でき、これ以上の抽象化ができない文節を1意味として単位化

し、一文の形でコード化した。

2) コード内容の類似性について検討し、共通な意味をもつコードをグルーピングし構成要素を分析した。

3) 類型化を繰り返し、内容が類似している項目をサブカテゴリー化し、さらにカテゴリー化した。そのうえでマッサージの技術が、学生自身の自己効力感にどのような影響を及ぼすのか明らかにした。

- 4) 分析は質的研究を行ったことのある研究者4名で行い、カテゴリー間の比較・関係性の検討を重ねた。そのうえで、分析の信頼性の確保を図った。

倫理的配慮

患者および学生に対し、研究の趣旨を説明し協力と同意を求めた。インタビュー開始前に文書と口頭で説明し、同意を得て行った。インタビュー内容は協力者の同意があった場合に限り、ICレコーダーに録音した。研究協力に対する説明は以下とした。

1. 患者への説明内容

- 1) 質問内容は、実施した技術の評価と効果について行うこと。
- 2) 参加は自由意志によること。
- 3) 調査協力を取りやめてもケアに不利益が生じないこと。
- 4) インタビューに学生が同席することで、学生自身が自己の学習を振り返る機会とするために行うこと。
- 5) データは個人が特定できないように匿名とし、研究目的以外には使用せず、プライバシーを守ること。

- 6) 本研究の結果は、本大学紀要および、研究の一部を学術学会等に公表すること。

2. 学生への説明内容

- 1) 患者のインタビューに同席することによって学生自身が自己の学習を振り返る機会とするために行うこと。
- 2) 参加は自由意志によること。
- 3) 答えたくない質問には答えなくてよいこと。
- 4) 調査の承諾後であっても、いつでも調査協力の取りやめができること。
- 5) 調査協力を取りやめても、学業や成績等に不利益が生じないこと。
- 6) データは個人が特定できないように匿名とし、研究目的以外には使用せずプライバシーを守ること。
- 7) 本研究の結果は、本大学紀要および研究の一部を学術学会等に公表する場合があること。

以上の手続き後、承諾を得て調査を実施した。

なお、本研究は、つくば国際大学倫理審査委員会において審査され、承諾を受けた。

表4. 患者属性およびリラクゼーションケア。

	年齢	性別	疾患状況	リラクゼーションケア
1	60代	男性	直腸切断術前2日	足浴+両上肢アロマセラピーマッサージ
2	40代	男性	肺部分切除術後3日	足浴+両下肢アロマセラピーマッサージ
3	40代	男性	人工骨頭置換術後4日	足浴+両下肢アロマセラピーマッサージ
4	60代	女性	胆石手術後3日	足浴+両下肢アロマセラピーマッサージ
5	30代	女性	SLE	足浴+両下肢アロマセラピーマッサージ
6	60代	男性	胆石症	足浴+両下肢アロマセラピーマッサージ
7	50代	女性	子宮摘出術後3日	両上下肢アロマセラピーマッサージ
8	80代	女性	転子下骨折術後2日	両上下肢アロマセラピーマッサージ
9	70代	男性	肺部分切除術後5日	両上下肢アロマセラピーマッサージ
10	70代	男性	肺部分切除術後2日	両上下肢アロマセラピーマッサージ
11	70代	男性	パーキンソン	両上下肢・肩アロマセラピーマッサージ
12	80代	男性	脳梗塞後遺症	両上下肢・腹部アロマセラピーマッサージ

結果

学生が表現したマッサージの効果(表5)

属性

1)学生の属性

本学医療保健学部看護学科4年生で、成人看護学および老年看護学実習でマッサージを実施し、研究趣旨に同意が得られた学生12名。うち1名が社会人経験者である。

2)患者の属性

成人看護学実習および老年看護学実習において、学生が計画した足浴やマッサージを受けた患者12名。年齢は30代～80代で、男性8名、女性4名であった。疾患状況は、手術後8名と慢性疾患4名であった。受けたリラクゼーションケアは、足浴とマッサージが6名、マッサージのみが6名であった(表4)。

学生が考えるマッサージの効果について分析した結果、24件のコードに分けられ、そこから8つのサブカテゴリー、3つのカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, コードを< >で表す。カテゴリーは【心身のリラクゼーション】、【関係性構築の効果】、【効果不明】が抽出された。

抽出されたカテゴリーのサブカテゴリーは、【心身のリラクゼーション】では、《心のやすらぎ》、《リラクゼーション効果》、《保温効果》、《睡眠効果》の4つに分類された。

【関係性構築の効果】では、《信頼関係形成》、《コミュニケーション技術》、の2つのサブカテゴリーに分類された。

【効果不明】では、《わからない》、《効果なし》の2つのサブカテゴリーに分類された。

表5. 学生が表現したマッサージの効果.

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	件数
心身のリラクゼーション	心のやすらぎ	・表情や言動が明るくなった	2
		・患者の表情が気持ちよさそうにしていた	1
		・表情やよかったとの発言で評価した	1
		・笑いの絶えない感じだったので、楽しい雰囲気だった	1
		・マッサージするだけで患者の表情が変わった	2
リラクゼーション効果		・気持ちいいと言ってくれたのでリラクゼーションとしての効果はあったと思う	1
		・気持ちいい、いい匂い、リラックスしたなどの発言があったため効果があった	2
		・実施中は気持ちいいと、不安はないと思う	1
		・マッサージ後の方が食欲が増進したため、患者がリラックス、安楽を得ることで、他の効果を得られることが分かった	1
保温効果		・実施後効果を持続することは難しいと思ったが、患者は足が軽くなりポカポカしたと言ってくれた	1
		・実施後30分たっても温かいと言ってくれた	1
		・教科書には温かさの持続の効果が書いてあったが、実際に温かさが持続すると本当だと思った	1
		・実施する前は手や足が冷たかったが実施後は温かくなった	2
睡眠効果		・アロママッサージ後、よく眠れたという発言があった	1
		・終了後、患者は昼寝をしていたので効果はあったと思う	1
関係性構築の効果	信頼関係形成	・アロママッサージを行うことで患者との信頼関係が作りやすくなった	1
		・移乗時「怖い」という発言があった患者の発言がなくなり、信頼が得られたと思う	1
	コミュニケーション技術	・(患者と)コミュニケーションがとりやすくなった	1
効果不明	わからない	・気持ちいいとは思いますが、アロマが確実に効いていたのかは分からない	1
	効果なし	・あまりないと感じた	1

表6. 患者のインタビューを聞いて学生が気付いた学び.

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	件数		
実施して気付いた学び	実施への意欲	・もう少し患者の気持ちをよくさせたいので練習したいと思った	1		
		・次の時も実施してみたいと思った	1		
		・機会があればもっといいマッサージができればと思った	1		
		・実施したことで評価してもらえたことが嬉しかったこと	1		
		・足浴の効果ももう一回試せたらよかったと思う	1		
		・機会があればまた行いたいその時にはもっといいマッサージができるようにしたい	2		
		・マッサージや足浴が必要な患者がいれば積極的に行いたい	1		
		・マッサージや足浴は続けていけたらいいと思う	1		
		・患者に喜んでもらえて、看護を提供するうえでもっといいケアを提供したいと思った	1		
		・アロママッサージ技術を向上させたい	1		
	・少しでも気持ち良かったと言ってもらえたことが良かった	1			
	成功体験の確認	・患者がすごく喜んでくれたので、やってよかったなどと思った	1		
		・患者から癒されたとか体が楽になったという言葉が聞けたのでそういう点で患者に良い影響をあたえることが出来たと思う	1		
		・患者の表情や言動を聞いて、温まるねって言われやってよかったと思った	1		
		・終わった後も気持ち良かったと言ってくれ、またやれたらやってほしいとも言われ、良かった	1		
		・看護を目指す学生として、患者の眠れないという状態を何とかしてあげたいという気持ちで、できてよかった	1		
		・患者がとても喜んでいたのでためリラックスができてよかった	1		
		・やって良かった	2		
		具体的方法の学び	・希望の強さは個人によって違うので、合わせることを考えた	1	
			・患者の動かしてはいけない方向があるという点に気づけたことが成長、学び	1	
・次にどうしたらいいか考えるので、実施してみて良かった			1		
自己中心的な介入	・今まで自分がやればいい、患者も気持ちが良いかならうと自分本位の考えがあった	1			
	・一般的なレベルでやればいいというところがあった	1			
患者の要望の取り入れ	・最初から患者の要望に合った強さでできなかったのが残念	1			
	・技術面をもっと身に付けていけば良かったと反省	1			
探究心	技術の追及	・オイルマッサージや精油の効果について理解してからの方が効果がわかると思う	1		
		・最初から患者に言ってもらえるような関係作りやコミュニケーションを持ちながらマッサージできればよかったと思う	1		
		・説明をきちんとしたい	1		
		・足浴後マッサージを行ったがマッサージだけだったらどうだったのか、足浴だけだったらどうなのか	1		
		・足浴は温まるがアロマを使うことで気分がリフレッシュするのか、いろいろやってみたい	1		
		・もっとオイルの種類があったほうがよかった	1		
		技術の修正	・技術の部分	1	
			・下肢を行ったとき患者が本当にリラックスできたのか疑問が残ったので、今後は下肢に重点をおいて行いたい	1	
		看護観の変化	癒しの看護	・人のきもちを癒すというのも看護として大切なのだと思った	1
				・人を癒すっていうことにすごく興味をもった	1
・一つ一つのケアが患者の健康状態を良くするという意味で、大事だということを改めて確認できた	1				
患者中心の看護	・自分本位だったという点が、患者さんを第一に考えなくてはいけないということに変わった	1			

患者のインタビューを聞いて学生が気付いた学び(表6)

患者のインタビューを聞いて、学生が気付いた学びについて分析した結果、41件のコードに分けられ、そこから9つのサブカテゴリー、3つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーは【実施して気付いた学び】、【探求心】、【看護観の変化】が抽出された。

抽出されたカテゴリーのサブカテゴリーは【実施して気付いた学び】では、《実施への意欲》、《成功体験の確認》、《具体的方法の学び》、《自己中心的な介入》、《患者の要望の取り入れ》の5つのサブカテゴリーに分類された。【探求心】では、《技術の追及》、《技術の修正》の2つのサブカテゴリーに分類された。【看護観の変化】では、《癒しの看護》、《患者中心の看護》の2つのサブカテゴリーに分類された。

考 察

学生が表現したアロマセラピーマッサージの効果

1. 学生が実施後に感じた患者に対するマッサージの効果

1) 心身のリラクゼーション

学生が表現したアロマセラピーマッサージの効果に【心身のリラクゼーション】がある。学生は患者の反応から、＜教科書には温かさの持続の効果が書いてあったが、実際に温かさが持続すると本当だと思った＞と述べており、身体への効果として《保温効果》を確認している。学生は学内演習でのロールプレイを通して、筋組織や末梢循環への働きかけから、＜温まる＞、＜足の疲労感がとれる＞ということを体験していた。しかし、演習は健康な学生同士で行うため、実際に患者から温かさの持続について聞いたことは、実感として記憶された

と考える。さらに、身体への効果だけでなく心理的な効果として《心のやすらぎ》も確認している。今回マッサージを受けた患者の殆どは術後であり、普段は術創部の痛みから苦痛様顔貌を呈することもあった。その患者が学生のマッサージにより、＜表情や言動が明るくなった＞や＜患者の表情が気持ちよさそうにしていた＞と語られていた。

マッサージは、施術者の手をとおし患者の身体に触れ合う技術であり、タッチングの効果も期待できる。タッチングは患者の痛みや不安の緩和を図り、安心感をもたらす技術である。森他(1995)は、タッチングの効果について、脳波や自律神経系の緊張を調査した結果、自律神経機能が安定すると報告している。分析したコードの＜患者の表情が気持ちよさそうにしていた＞より、学生が行ったマッサージ技術もタッチングの効果同様に、患者に痛みの緩和や、安心感をもたらしていた。このことは、患者の表情が明るくなったことで、学生はリラックス効果として《心のやすらぎ》を確認できたと考える。

2) 関係性構築の効果

学生は、＜アロママッサージを行うことで患者との信頼関係が作りやすくなった＞と述べており、《信頼関係形成》に役立つ効果が確認できた。最近の学生は電子媒体の発達によるものからか、対話によるコミュニケーションが苦手といわれる。本学の学生も同様である。このような学生にとって患者に安心感をもたらしたマッサージは、有効なコミュニケーション手段といえる。これは、臨地実習で学べるコミュニケーションを基盤とした人間関係能力を育成する重要な機会となったといえる。

3) 効果不明

効果不明では、学生は＜気持ちいいとは

思うが、アロマが確実に効いていたのかは分からない」と語られ、学生はマッサージの効果だけでなく、アロマオイル(精油)の効果も含め「効果」について評価した回答であったと思われる。今回準備したオイルは2種類であったため、患者が期待するオイルを選択できなかったことが要因であると考ええる。今後は、既習の知識であるオイルについても検討し、学生の学びを深める努力が必要であると考ええる。

2. 患者のインタビューを聞いて学生が気付いた学び

1) 実施して気付いた学び

学生は《成功体験の確認》のなかで、＜マッサージをやってよかった＞ということをも8コード述べていた。自己効力感を高める4要因として、①遂行行動の達成、②代理的経験、③言語的説得、④情動的喚起がある。今回、学生が患者から得られた結果の《成功体験の確認》は、この①遂行行動の達成によるものといえる。高村(2004)は、遂行行動とは、“過去においてやってできた”という行動で、これまで自分で行動し、達成できたという成功体験とそれが積み重なっている場合に、自己効力感が高まると述べている。さらに高村(前掲)によると、Banduraは、4要因の中で、この遂行行動が最も力があるとも述べている。学生は、＜機会があればまた行いたい。その時にはもっといいマッサージができるようにしたい＞などと《実施への意欲》も示していたことから、成功体験は学生の自己効力感を高め、また実施したいという動機づけにもなったと考える。また、マッサージを実施したことで気付いた学びに、《自己中心的な介入》がある。学生は＜今まで自分がやればい、患者も気持ち良くなるだろうと自分本位の考えがあった＞と語っており、これまでの技術に対する自己の内省が働いたと考える。

本来、看護技術は患者に必要な援助として、計画立案され実施される。そして成果として技術の評価をしなければならない。評価をするうえで患者の反応は重要である。本当に患者にあったプランかどうか、患者の反応の観察なくして評価はできない。学生が学ぶ看護過程には、情報収集・アセスメント・計画立案・実施・評価があるが、評価の点で＜今まで自分がやればい＞と述べていたのは、実施後の患者の反応について十分な観察の視点がなく学習していたことが伺える。

この学生のように、《自己中心的な介入》をしている学生は他にもいると思われる。今回、このように学生自身の技術について自己と真摯に向き合い内省できたことは、患者がリラックスした表情で、学生のマッサージに対し、快の言動を示してくれたことが要因と考える。マッサージの技術を通して、患者のリラクゼーションのみならず、学生自身のリラクゼーションにも影響し、学生の人間的な成長を促したといえる。

2) 探究心

探究心では、《技術の追及》と《技術の修正》について、学生は＜足浴後マッサージを行ったが、マッサージだけだったらどうだったのか、足浴だけだったらどうなのか＞や＜足浴は温まるがアロマを使うことで気分がリフレッシュするのか、いろいろやってみたい＞、＜下肢を行ったとき患者が本当にリラックスできたのか疑問が残ったので、今後は下肢に重点をおいて行いたい＞などと語られた。永野(2000)は、Brunerの「教育の過程」について、学習という行為(the act of learning)は、「新情報の獲得」、「変換」、「評価」など三つの過程から成ると述べている。学生はマッサージを実施した患者の反応から、既習知識であるリラクゼーションの技術について、新たに考え直さなければならないと考え、＜下肢を行っ

たとき患者が本当にリラックスできたのか疑問が残った」と、自身の技術を評価していたと思われる。学生は一つの看護技術から新たな技術や技術の組み合わせの検討など、看護技術への探究心が芽生え、マッサージは「学習という行為」として重要な役割を果たしたと考える。

3) 看護観の変化

筆者は、看護者の多くは看護を継続すればするほど看護について、「看護とは」、「私が求める看護とは」などと悩むことがある。悩みながら成長するものだが、この時、自分の看護の原点に戻り考える礎となるものが「自己の看護観」と考える。そのため、看護学生のときから「自己の看護観」をもち深めることは重要である。

学生は、「患者さんを第一に考えなくてはいけない」と《患者中心の看護》を述べていた。学生は指導された言葉として、「患者中心の看護」はわかっていたが、今回、患者の実施後のインタビューに同席することで自己を内省する機会となり、机上ではなく、実際に体験することで意味的な「患者中心の看護」について、初めて認識したのではないかと考える。このように意味付けできた意識は、看護をするうえで重要であり、学生の看護観として、ゆるぎない柱の一つとなったのではないかと考える。

また、《癒しの看護》については、新しい概念として学生の看護技術の枠組みに組み込まれたと思われる。今後臨床において、学生が行ったマッサージは、「癒しの看護」として展開されることが期待できる。

インタビューに学生が同席する意味

自己効力感を高める4要因の一つに「言語的説得」がある。

高村(前掲)は、「言語的説得とは、自分に対

する暗示や他者から言葉を使って説得される、または励まされることであり、このことは、自己効力感理論が相手にきちんと言葉を使って伝える欧米の文化から生み出された刺激要因であるが、言葉に出して相手に伝えることが、日本人に欠けているからこそ重要なのではないかと述べている。今回、学生が患者に行ったマッサージの効果について、教員が患者にインタビューを実施した。インタビューの際には患者の同意のもと、意図的に学生が同席する機会をつくった。患者はインタビューを行っていくうちに、学生が同席していたからではなく、学生のマッサージ技術を高く評価した言葉で、「癒された」、「体が楽になった」、「温まるね」、「終わった後も気持ち良かった」、「またやれたらやってほしい」と効果を伝えられた。学生はこれらの患者の言葉を通し、学生自身が行ったマッサージの技術をフィードバックできたと思われる。

岡村(1996)は、効果的な学習行動として、「学習の途中で、学習者に対してこれまでの結果を知らせることによって学習は効果的になされ、それがフィードバック効果である。フィードバックは、学習者の動機づけを高め、学習の意欲をもちあげるという効果をもっている」と述べている。

インタビューに学生が同席する意味を、図式化し振り返る(図1)。今回、学生が実施したマッサージの技術は、患者との関係性構築の効果と、心身のリラクゼーションの効果をもたらした。そして、患者からマッサージの効果を聞くためのインタビューに学生が同席することは、直接、患者から効果を聞ける機会となり、フィードバック効果により成功体験に気付いたと考える。それが動機づけとなり学生は、さらなる実施への意欲やマッサージへの探究心を抱かせ看護観も深め、学生の自己効力感を高める効果を得た。マッサージの技術は患者からの良い評価が期待でき、コミュニケーションの手段にもなり、臨地実習の成功体験に導けると考える。これらのことから、教員は学生の自己効力

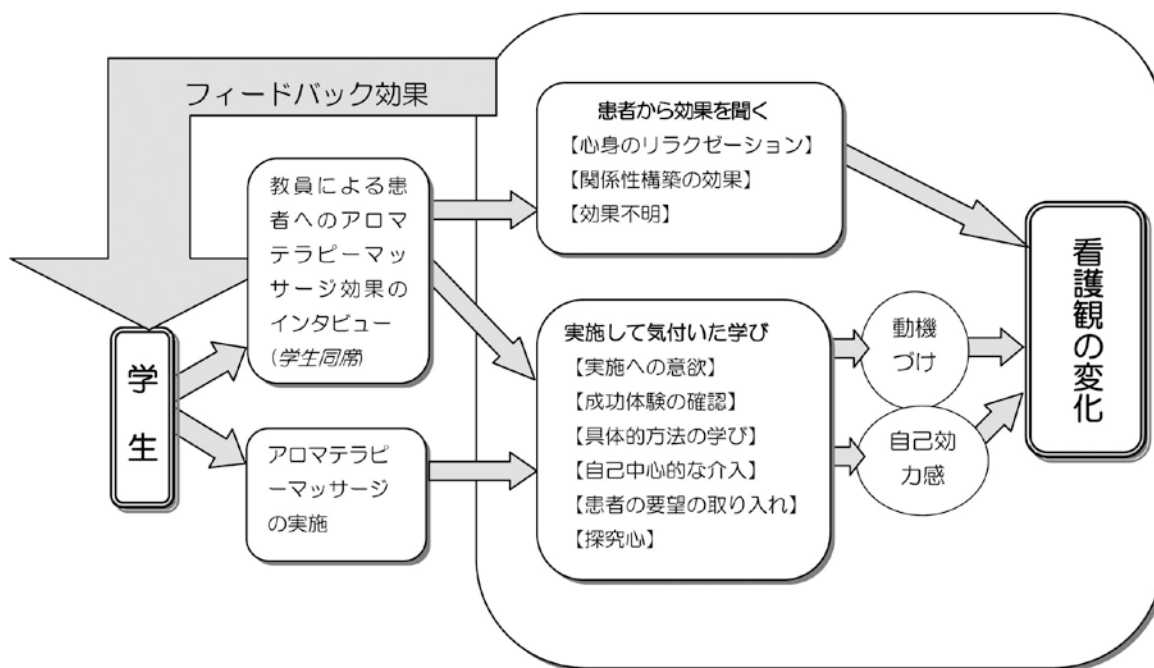


図1. 患者インタビューに学生が同席する意味.

感を高められるような関わりが重要であると考える。

結 論

1. 学生から得られたアロマセラピーマッサージの効果は、【心身のリラクゼーション】、【関係性構築の効果】、【探究心】、【効果不明】、【実施して気付いた学び】、【看護観の変化】の6つのカテゴリーであった。
2. 今回、学生が患者のインタビューに学生が同席したことによって、直接患者から効果をフィードバックされることは、学生のケアに対する動機付けおよび自己効力感を高めることにつながった。さらに、これらのことが看護観の変化に影響する要因になったと考える。

本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は本学学生12名であり、限

られた一大学一学科の少ない標本数であった。また、マッサージ実施後の調査であったため、実施前後での評価を比較検討することができなかったこと、失敗体験も含めた検討ができなかったことに、学生の行動変化を検討するには限界があったと考える。今後は、本学のみならず、他学科・他大学の学生の看護技術の実施前後で調査を行い、フィードバック方法以外にも自己効力感を高める要因を検討していくことが必要と考える。

謝 辞

本研究にご協力いただいた成人看護学実習Ⅱ・老年看護学Ⅱで、学生のアロマセラピーマッサージを受けてくださった患者様と、本学4年生学生の皆さまに、深く感謝いたします。

本研究は平成22年度 つくば国際大学共同研究費の助成により行われた。

参考文献

- 飯島佐知子, 賀沢弥貴, 平井さよ子 (2008) 自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究. 愛知県立看護大学紀要. 14:9-18.
- 伊藤綾子, 駿河絵里子, 藤井美和 (2008) 基礎看護技術の主体的な学習法に対する学生の反応－看護技術の演習方法の変化と技術習得過程における動機付けとの関連－. 東京医療保健大学紀要. 1:29-35.
- 岡村一成 (1996) 人間の心理と行動. 東京数学社, 東京.
- 厚生労働省 (2003) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書.
- 佐伯胖 (1996) 「学び」の構造. 東洋館出版社, 東京.
- 坂野雄二, 前田基成 (2002) セルフ・エフィカシーの臨床心理学. 北大路書房, 京都.
- 篠原彰一 (1998) 学習心理学への招待－学習・記憶のしくみを探る－. サイエンス社, 東京.
- 園田麻利子, 花井節子, 上原充世 (2008) 自己効力感を高める実習前演習のあり方の検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要. 12:64-81.
- 多鹿秀継, 竹内謙彰 (2007) 発達・学習の心理学. 学文社, 東京.
- 高村寿子 (2004) 自己効力感を高め主体的行動変容を目指す健康教育プログラム実践マニュアル. 社団法人日本家族計画協会, 東京.
- 永野重史 (2000) 発達と学習－どう違うのか－. 放送大学教育振興会, 東京.
- 原田真里子, 櫛引美代子, 工藤千賀子 (2007) 「リラクゼーション」、「指圧」、「マッサージ」に関する看護研究・看護教育の現状および学士課程教育における今後の課題. 弘前学院大学看護紀要. 2:1-8.
- 南裕子 (1990) 行動科学と看護理論. 医学書院, 東京.
- 森千鶴, 村松仁, 永澤悦伸, 福澤等 (2000) タッチングによる精神・生理機能の変化. 山梨医科大学紀要. 17:64-67.
- 横山孝子, 大澤早苗, 嶋井久美子, 高木佳寿美 (2005) 学習過程の分析からみた学生の主体性の形成に関する一考察. 保健科学研究誌. 2:59-68.

Original article

The meaning of student presence at interviews among patients after aroma therapy massages: a study of learning methods to improve self-efficacy among students at fieldwork

Kyoko Kariya, Chiyoko Seki, Taeko Adachi, Midori Nagashima

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

Nursing students obtained opportunities to be at interviews concerning effects of aroma therapy massages among patients who experienced this therapy in this study. The purpose of the study was to analyze how those students understood feedback and reactions from patients and to discuss learning methods for nursing students. The subjects were 12 nursing students and a semi-structured interview was administered for those students. Data was analyzed with a qualitative and descriptive method and results, six major categories and 17 subcategories were extracted. The major categories were: Relation for body and mind, Effects of constructing good relationships, Inquiring minds, Unclear effects, Knowledge after providing aroma therapy massages and Changes of viewpoints of nursing. It was suggested that the learning methods with student presence at interviews, which directly provided students feedback and reactions from patients, enhanced internal motivation toward learning and improved self-efficacy among students. [Med Health Sci Res TIU 2: 117-129 / Accepted 2 March 2011]

Keywords: Nursing students, Aroma therapy massages, Self-efficacy, Learning methods, Feedback